

毎日新聞

2015年10月25日（日）

虐待受けた子供

虐待など親から不適切な養育を受けて反応性愛着障害（RAD）になった子供の脳は、そうでない子供に比べて視覚的な感情処理に関わる部位が小さい傾向があることが福井大などの研究で明らかになつた。やる気や意欲などに関わる部位の活動が低下していることも判明。實められても心に響きにくいと考えられ、被虐待児に一般的に施される「成果を變める」などの心理療法の効果が少ない可能性も出てきた。

研究成果が欧州などの専門誌電子版

褒めても響かぬ？

に掲載された。

RADは、子供時代に養育者から受けた体罰や暴言によって養育者への愛着がうまく形成されずに発症する精神疾患の一種。衝動や怒りのコントロールが難しいなどの症状がある。

研究グループは、10歳～17歳のRADの21人とそうでない22人の脳の断面を磁気共鳴画像化装置（MRI）で撮影。形態や働きを比べてみると、脳の活動を平均が、RADの子供はそうでない子供の半分以下だった。この結果から、RADの子供は「報酬」部位はダメージを受けないと他人の表情から感情を読み取りにくくなるといい、虐待などが脳に影響を与える、症状につながっている実態が分かった。

また、10～15歳のRADの子供16人との違いが分かった。セントーの友田明美教授（小児発達学）は「RADや関連する精神疾患の発症メカニズムの理解や治療法の開発につながる成果」と話している。【村山豪】

脳の活動低下

福井大など研究
他人の表情も読み取りにくく



研究成果を発表する福井大子どものこころの発達研究センターの友田明美教授、島田浩二特命教授、福井大病院の滝口慎一郎医師（右から）＝永平寺町の福井大松岡キャンパス